

米国に於ける高等教育の実情について

—— 短期大学教育コミュニティ・カレッジを中心に ——

田 中 博

米国の高等教育の実情を視察し、中日本自動車短期大学の将来に資することがあればという目的をもった研修旅行であった。7月18日に大学を出て、学生のハワイ研修旅行に同行し、その後アメリカ本土に渡って、各地の大学・短大を視察し、8月3日に帰任しました。訪問したり、視察出来た大学及び短期大学は次の通りである。ハワイ大学、リーワード・コミュニティ・カレッジ、ジャボー・コミュニティ・カレッジ、ヘンリーフォード・コミュニティ・カレッジ、ハーバード大学、マサツセッチュ工科大学、バンカーヒル・コミュニティ・カレッジ、チェンバレン・ジュニア・カレッジで講演を聴いたり、インタビューをしたり、教育施設の見学をしたりして、短期間の日時ではあったが、きわめて成果のあった研修旅行であった。私の報告担当は、主として、アメリカの高等教育実情と、各校で行なったインタビュー及び質疑のうち、私たちの学園の将来を考えるにあたって、参考になりそうなものについて、概要を報告したいと思う。今回の研修に当って、多くの方々にご協力をいただきましたが、もしも、私の報告に多少でも実り多いものがあるとするれば、その皆様のご支援の賜だと感謝を致しております。又、当地で私共に長時間学校案内、インタビューに答えて下さった広報担当者及び直接面談して下さった三つのコミュニティ・カレッジの学長及びハワイ大学夏期セミナー学長からは多大のご教示をいただきましたことを銘記し、感謝致したいと思います。

1) 調査の対称、目的、方法について

アメリカの高等教育事情の視察を命じられた時に、私が考えたことは、私達が直面している短期大学の将来、もっと具体的には、中日本自動車短期大学の将来を考えるのに役立つ研修が出来れば良いと思ったことであります。期間が18日間で、アメリカの短期大学の実情を見るとすれば、あらかじめきわめて狭い枠の、重点的な調査を実施する以外に、その責任を果たすことは出来ないと考えた。訪問した学校は前述した通りであるが、調査対象として、主としてインタビューや学長面談、施設見学、教科内容等、重点を置いた学校は公立短期大学（全て今回は、コミュニティ・カレッジ）3校、私立短期大学1校とし、合衆国（本当は合州国の方が良いと思う）の地域性はどの分野に於いても大切であるが、教育機関についても地域独自性を考慮に入れて、太平洋側——西海岸側、中西部、大西洋側——東海岸を選んだ。コミュニティ・カレッジ3校と私立1校の割合は、アメリカに於ける短期大学生の在学学生数は1980年の統計によれば、公立短大95%、

私立短大5%（1950年には77%対23%であった）と圧倒的に公立短大生がアメリカの短期大学を制しているからである。日本では、およそ逆で、90%近くは私立短大で占められている。合衆国に於ける学生数の推移について簡単にデータにふれると、4年制大学では、1950年と1980年の30年間に、公立で5.2倍、私立で2.2倍、短期大学では公立で20.6倍、私立で4.2倍である。短期大学の将来を占うにあたって、公立短大、特にコミュニティ・カレッジの異常な発達ぶりを研究対象とすることが、私に参考になるのではないかという予測を持たせた大きな理由の一つである。調査は、アポイントを取る段階できわめて難問にぶかった。7月中旬から8月にかけての調査期間内は3ヶ月の学年末休暇に入っていたことから、担当者の休暇等、連絡に難しさがあつた。しかし、それにもかかわらず、調査対象校のいずれもが、秀れた対応を示し、アメリカ人の応接の良さとその努力には感心し、深い感謝をしたい。インタビューの為に、三都市で一人づつ計三人の通訳者を依頼し、出来る限り録音の許可を取った。三人共、秀れた通訳者であるばかりでなく、アメリカの大学に通じた人選であったことを記しておきたい。サンフランシスコではオサダ氏（カリフォルニア大バクレー校出身者）、デトロイト市では吉田氏（応用物理専攻でミシガン州立大の研究者、博士である）、ボストン市は、ミセス青木で Technical Visit の Interpreter であつた。

2) アメリカ高等教育の一般的特質について

現在のアメリカの高等教育の実情を語って下さった、ハワイ大学での、アグネス イエナガ教授の講演概要をご紹介します。この講演は、神野学園のハワイ研修旅行の全員を対象として、1984年7月19日ハワイ大学で行なわれたものである。

『最近の米国事情——高等教育の実情——日本との比較から』

（要旨）米国の大学の現状を語るのに一番ふさわしいのは、成人教育又は生涯教育としての大学教育という側面を語ることであろう。アメリカの大学教育に比べれば、日本のそれはきわめて、規律的で、規則的であり、文部省の法律が厳格である。例えば、入学年齢に例をとってみても、日本では入学年齢は一律であるが、アメリカでは、様々な年齢の者が入学する。アメリカの大学生は余り専攻というものに強い関心がない。（工学部や経済学部は別にして）自分の将来の職業に明確な目標をもって進学するものは少ない。それ故に大学卒業後で就職後、その職業上の必要又は転職を考えて再び大学に転入する者が多い。自己確立、自分は何になるのかを長い間に考える特徴があるといえよう。アメリカの大学では国内の国公・私立を問わずに単位を相当に認め合う自由さがあり、外国の大学の単位も認めるから、途中で外国の大学に留学しても、その単位を認定されるので、留学期間中の時間的空白が生じない。又、州立大では、退職した老人(65才以上)が無料で大学の授業を受けることが可能である。ただし、正規学生が登録した講座で、残り席がある講座についてのみという制約はあるけれども、それでも70才ぐらいになってハワイ大でも学士になった人々がいる。アメリカでは物ごとが安定していない、世の中の変化がきわめて急激で

あり、その為に、仕事の種類、内容が、それにもなって変化する為に、人々がその職業を失ったり、自分で見切りをつけたりする人々、30代や40代の働き盛りの人々が、転職の為に、大学に戻ってくる。例えば、現在はコンピューター関係の講座が多くの人々を集めている。これが主としてアメリカでの成人教育の中心的背景である。日本へ行った時の見聞によれば、日本での成人教育は文化センターがあって英語を教えたり、源氏物語を教えたりしているのがあったが、それは中年の奥様方とか、まだ就職をしていない若い20代の女性達という人々を対象にしているように思えた。アメリカの成人教育の中心は、働いている人を中心とするので、夜間の授業が一般的である。ハワイ大学でも実に多くの講座があって、学士号を取りたい人々のための単位のある講座、Career 職業転換に必要な職業的な講座、余暇を有意義にする講座、後者は単位とはならないものであるが、存在する。10週間単位で1年に4回開講される。10週間で1学期分に相当するようになっていたので、例えば3単位のものは週3回、各々2時間は2時間半という長い、ハードスケジュールとなる。1年間で12単位ぐらい取る者が多い。学士を取るには、特に3年生、4年生科目は正規の昼間部で取る必要があるので、最低一年以上は正規の授業を受けないと学士号はとれない。大学に於ける成人教育、又社会人に開かれた講座はきわめて多く、アメリカの現状に適合しているものである。

1960年代に学生暴動がアメリカのハーバード大学コロンビア大学等多くの大学で生じた。学生の取りたくもない単位などはいらぬというような、学校の運営に学生の意見を入れる、それも力によって嘴を入れる時代があった。必修科目でも、安易な方に流れて、例えば外国語を必修から外した大学が多数あったが、現在では大学が、学生の要求に屈したのは、まちが이었다という大学人の反省で甦った。例えばハーバード大学では5年前から必修科目に復活している。ハワイ大学では最初から必修であって、今もそれはかわらない。外国語はハワイ大では日本語が一番多い。理由は就職に有利であるからである。又就職した上で必要に迫られて外国語を夜間で勉強にくる人々も増加した。

アメリカの大学教育は、大学卒業が、教育の完成ではないというのが基本的考え方になってきている。むしろ出発点であるという考え方で、大学では論文の書き方、資料収集の方法、図書館の利用の方法、例えば外国語についていえば、外国語の意義と学習の方法等を身につけて、就職したのちも、一生の間、より良い人間となる為の学習の出発点と考えるというのが一般的物の考え方となっている。アメリカの大学教育は日本の教育とは大部異なる。アメリカでは転学、転部、休学、留学が非常に自由であると同時に余りロスなしにすることが出来る。アメリカでも有名大学では、3年生は、どこか外国の大学で一年勉強をすることを勧めている所が多い。それによって休学しても、外国の大学の単位はまるまる認められることが多いので（但し、単位取得の成績が悪いC、とかDとかの成績だと、アメリカの大学では不認定とすることがある）広い視野を養うのと同時に、時間的ロスを帳消しにしてくれるという有利性を強調する。日本では、ほとんど一年間留学期間はブランクになってしまう。日本では大学に入るのが困難だけれど卒業は簡単だ

が、アメリカではそれは逆の現象が多い。成績はきわめて厳しい。アメリカでは一度の試験を受ければ、いくつかの大学に願書を出せるので、どこかに入学出来ることが多い。

アメリカでは又、自費で大学へ行く。働いて学費をかせいで行く。奨学資金をもらうということが当然のことである。アメリカの評価点はきわめて厳格である。Aは100~95、Bは94~85、Cは84~80……と日本では考えられない点数である。それでもアメリカの Full time の正規学生で学位を取る学生は、成人教育の夜間の学生に比較すれば、勉強の目的が甘く、のんびりしているように見えるほどである。

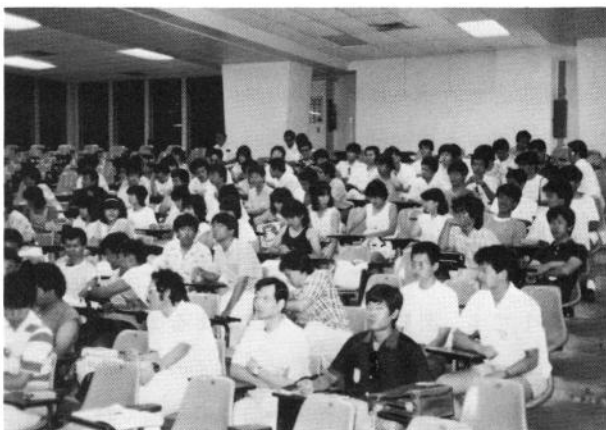
20年、30年前に比べれば、大学教育は変化してきた。役目も変化した。大学生は消費者であるという説がある。大学生である消費者がほしいもの（科目）だけが売れる。売れる科目を作り出さなければならない。消費者中心になってきた。その為必修科目以外はやさしい講座、論文を書かなくてもよいものへと流れる傾向が強い。アメリカではここ10年ほどの間できわめて、学力の低下が叫ばれているが、映像-テレビ等に流されて、英語力（国語）の低下がはげしい。読み書きの力が非常に低下していることが問題になっている。ハワイ大学では英語を多く使う講座を最低12単位は取るという案を考えているところである。現在は結局は、英語力の落ちる学生達は、就職をして、報告書等の書く力がなくて、はじめて自覚的に、成人教育-夜間授業-にきて勉強している者がいる。この傾向がアメリカの高等教育の一つの特長を示しているように思える。

（講演後の質疑の中から）

サマー・セッション（夏期学校）は6週間で一学期分の授業を消化するので、学位にかかわる単位は6単位取得できる。サマー・セッションは12週間（3ヶ月）あるので、12単位まで取れる。サマー・セッションに出る学生は、休学していた人、単位を落した人、早く卒業したい人等の中心になっている。



ハワイ大学キャンパス



ハワイ大学教室

3) 公立短期大学—コミュニティ・カレッジ三校のインタビュー

- (i) Chabot College (Hayward Campus) 25555 Hesperiau Boulevard Hayward, California 94545
- (ii) Henry Ford Community College 5101 Evergreen Road at Ford Road Dearborn, Michigan 48128
- (iii) Bunker Hill Community College Retherford Avenue Boston, Massachusetts 02129

上記の三校を選んだ理由を簡単に述べれば①アメリカの地域性、西海岸、中西部、東海岸の三つに在るということ。②自動車科又はコンピューター関係の学科を持っている学校ということである。

Chabot College：1984年7月23日、Lee, I. Hinckley（教育学博士）との対談を行なった。

（概要）

コミュニティ・カレッジはアメリカの教育機関である。総合大学（4年制大学）が、ヨーロッパのものであったのに対し、短期大学、コミュニティ・カレッジはアメリカ独自の大学でアメリカに始まったものである。その最初のもは、19世紀の終りごろ、アメリカ中西部に始まったものである。

コミュニティ・カレッジは三つのタイプがある。

- ① Technical vocational Training 職業訓練又は職業教育
- ② General Education 一般教養又は一般教育
- ③ ①と②の両方の機能をもつ

このシャボ—短期大学は……

Chabot Colleges offers a two-year curriculum designed to (1) permit students to transfer typically as juniors, to leading four-year colleges and universities; (2) provide technical training to prepare students for employment in occupations requiring two years or less, or to assist persons already employed; (3) make continuing education available to residents desiring to increase their knowledge and skills. Special courses and instructional services are also available to students with ethnic interests.

(1) 4年制大学へ進学する為のもの。(2) 一年課程及び二年課程の職業訓練コース。(3) 継続教育及び少数民族の為の特別コース。

……おおまかに区分して以上の3つの教育プログラムを持ったコミュニティ・カレッジで、それを私達は Comprehensive Community College と呼んでいる。一般教養又は進学コースと呼ぶコースの学生は4年制大学の三年生課程に編入可能である。職業訓練又は職業教育コースは、a) 職業訓練を一年前後で終了し、資格(Certificate)を取るもの。b) 大学二年生の課程としてA. A. 学位を取るものの二つに分類される。シャボ—短期大学は、現在およそ1万8000人の学生がいる。おおまかに云えば、そのうちの半数が職業教育であり、その半数が一般教養に所属してい

る。授業は、昼間（月～土）と夜間（月～金）の課程をもっているのに、full-timeの労働者も多数学ぶことが出来るようになってきている。又、何科卒業というような勉強の仕方以外に、趣味的に自分の取りたい講座だけを楽しむという形の学生も存在する。アメリカは全部で50のStatesから成り立っているが、その全部の州に多かれ少なかれ、コミュニティ・カレッジを持っている。カリフォルニア州を例にとれば、110のコミュニティ・カレッジがある。そのほとんど全部が、公立であるから、税金で賄われている。6年前（1978年）にプロポジション13（地方税大巾減額計画）法案が通過してCommunity町の不動産税が大巾に減額されたために、それ以前は、公立短大は、町や郡の税金で80%、州の税金で20%が賄われていたのが、全く逆転してしまった。又同時に公的教育費に対する減額が行なわれた。1983年-1984年学年度まで、現在までカリフォルニア州では学費は無料であったが、1984年-1985学年度、すなわち9月からは3ヶ月が一学期制であるので、その一学期分\$50ドルの学費をとるようになる予定である。カリフォルニア州の大学システムは三つに区分される。(i) U.C. Berkeley, U.C.L.A.等University総合大学 (ii) 州立大学(States University) (iii) Community Collegeから構成されている。コミュニティ・カレッジに寮は存在しない。地域の大学であるから、通学することが原則である。以前はJunior Collegeと呼ばれていたが、なぜJuniorなのか、二流なのか、質が悪いのかという反論があって、地域の学校という意味でCommunity Collegeと名付けられた。シャポー短期大学は州の下にある郡を基準にした学区があって、ここはSouth Countyと呼ばれているところである。それで、South County Community College Districtと呼ばれる学区で、シャポー短期大学は同じSouth Countyにあるリボモア市に、Valley Campusという分校を持っている。

カリフォルニア州の大学では、学校全体のことを決定するのに第一の権利を持っているものに、Boad of Trusteesという理事会を持っている。シャポー短期大学では学長を含めて7人の理事がいる。無報酬であり、ボランティアである。様々の職業の弁護士とか会社員、主婦、学生も一人いる。投票によって選ばれるものである。但し、学生代表は投票の権利はない。ただこの理事達は、学長になりかわりたいとする人々がいて困ることもある。このBoad of Trusteesによって、州や郡の意向ではなく、大学の自治をおかされないようにしている。州の意向は、Chancellor, 市会議員等を通して学校に伝えられる。Boad of Trusteesは、カリキュラムや、先生の採用等にも第一の投票権をもっている。

(質疑)

問. この学校の学生の平均年齢は？

答. 毎年調査をしています。1984年には平均年齢は27才です。もち論、昼間より夜間の学生の年齢は高い。27才というのは両方の平均である。

問. 職業教育と一般教育の学生の分布割合はどんなものですか。

答. 職業訓練と一般教育の割合は、現在はおおよそ半分半分であるでしょう。シャポー短大でも

以前は一般教育のコース在学生のパーセンテージは高かったのですが、段々、職業訓練の人々が増加してきていて、以後も、増加している傾向です。それはアメリカに於いては、職業訓練を受けた学生に段々、就職に有利になってきたということがあるからです。これを表現するに、私は、Tramatic - Dramatic という言葉を、相対的に使っています。コンピューター産業は Dramatic 自動車産業は Tramatic、なぜならアメリカでは自動車産業、特にこの近くの G.M. の工場は閉鎖されてしまいました。(日本の TOYOTA と合併で、再開されるらしい。) だから Tramatic だと云うのです。減退していく産業の労働者を再教育していくことに重要な意味がある。職業転換の手助けをするという意味で。

問. 4年制大学を卒業して、こちらに来る人はいますか。

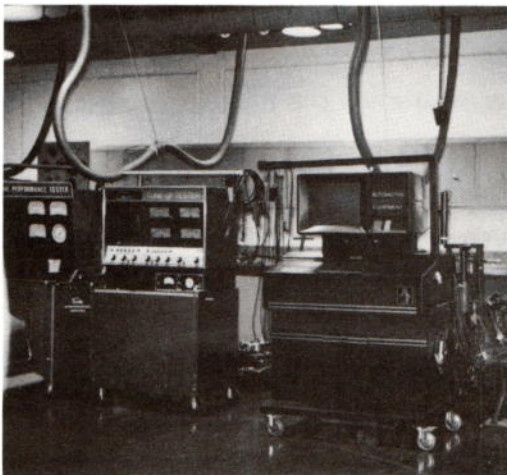
答. 4年制の大学卒業生だけでなく、なかには博士号を持っている人もいます。

問. 州とコミュニティ・カレッジの対立点は何ですか。

答. そんなに多くの問題があるわけではない。しいていえば、大学3年生編入生の(Transfer)の学生数をもう少し減らして、職業訓練(Vocatioual)を増やしてほしいという希望がある。

問. 現在のパーセンテージについては？

答. 編入学(Transfer)は30%である。他のコミュニティ・カレッジはもっと低くて10%ぐらいの所もある。この学校の卒業生が30%も進学していくのは、すぐとなりには Hayward University という4年制の州立大学があるという地理的な有利もある。残りの20%は、個人的理由で進学しない。兵隊に行く者、移住していく者、等自然の理由によるものである。コミュニティ・カレッジは、回転ドアのようなもので、Drop out して出ていく人、Drop in して入って来る人もいる。出たり入ったり、入ったり出たりきわめて自由なシステムになっている。又それにふさわしい授業を準備している。



自動車科実習教室



コンピューター教室：リー・ヒンクル博士(中央)

Henry Ford Community College 1984年7月26日 訪問

ここでの対面者は広報担当のアルフレッド・フォスター氏と学長のスタート・M・バンディ博士であった。ここでも多数の広報印刷書類、学校名の入ったペナントや、バッヂまでそえられていた。休暇中にもかかわらず、学長も1時間程、私達の為に学長室で面談して下さった。

この学校は、アメリカ自動車産業のメッカ、デトロイト市の郊外のディアボーン市にあって、広大なヘンリー・フォード1世の所有地の一劃にある。広大な野原と林の中に、フォードのワールドセンター、ヘンリー・フォード自動車博物館やフォード工場も点々と存在する地域である。ヘンリー・フォード1世の所有地がこの学校に提供され、そのすぐ横には、ミシガン州立大ディアボーン分校も又、フォード氏の土地を提供されたものである。

カリフォルニア州のシャボナー短期大学とほとんど異なるところはないが、インタビューの中で多少異なっている点のみここに書きとめておきたい。

学生総数は1万4千人、平均年齢28才。もともとこの学校は2年制の Liberal Arts 一般教養を主体として始まった歴史的背景とミシガン州立大学ディアボーン分校が隣接して設立されているのできわめて、4年制大学進学コースに学ぶ者が多い。学生の80%は、4年制準備教育に学んでいる。学校案内パンフレットに2+2 Program というものが多い。これは、この短大の2年間+ミシガン大学2年間教育を意味している。4年制大学への準備コースのキャッチフレーズである。入学案内の問合せ先は、短大と大学の両方の案内セクションを載せている。単位を認定される教育科目の指導を受けることが出来る。

このコミュニティ・カレッジ財政基盤は州の援助が50%、授業料25%、住民税（企業税、不動産税）その他国からの援助を含む3%となっている。設立当初から授業料は安いけれども取っている。その為、州及び郡からカリフォルニア州ほど注文を受けることはない。

〈主な質疑〉

問. アメリカでは、私立大学で学生減による閉鎖校があるときくが、その理由は？

答. 大学の数が多すぎることと同じような教科内容のプログラムが多すぎることだろう。このデトロイトでは、正しい社会ニーズにあった教科を持っている短期大学や職業専門校は結構、うまくいっている学校が多い。デトロイト市の中心には、自動車技術を教える私立の Technical School は仲々繁栄していると聞いている。

問. ヘンリー、フォード短期大学がうまくいっているポイントは何ですか。

答. 三つのポイントがあると思う。

- ①私達のような学校は、社会や学生のもとめる教育内容に、4年制大学とはちがって、簡単に变化させることが出来る。
- ②4年制大学や特に私立大学に比較して授業料が安い。私立大学は年間7000ドル程度かかる。(寮舎も含めて)しかし、コミュニティ・カレッジは通学生のみであるから、2年間

で約3000ドルでよい。

- ③ヘンリー・フォードコミュニティ・カレッジはアメリカ合衆国の中で、教育評判が良く、10指に入るといわれていること。

Bunker Hill Community College 7月31日(火)

ミセス・キャサリン・テーハムさんと学長ハロルド・F・シプリ博士と面談することが出来ました。この短大のある場所は、ボストン市でも、チャールズ川を渡ったケンブリッジ市側にあって、パンカーヒル記念塔のあるすぐそばにある。ここにはアメリカ史の中でも有名な場所である。1775年6月15日独立戦争開戦後最初の激戦地である。私達の見てきたアメリカのコミュニティ・カレッジは歴史が浅いが、ここは1973年に出来た。マサチューセッツ州で最も新しく設立されたものである。コミュニティ・カレッジは州立である。学生総数は約6500人（昼3000人、夜3500人）2年前までは、学生数は増大してきたが、ここ2年間は、ほとんど増減がない。昼間部の平均年齢は24才である。4年制へ Transfer して行く学生は約50%で、その学生達が4年制大学へ行く前にここで学習する理由は大きく分けて2つある。① 授業料が安い ② 高等学校で充分進学準備が出来なかったので、ここでそれを取りもどす。進学する学生は Liberal Arts 一般教育の学生で、技術教育のコースは進学が困難である。技術コースでは、コンピューターや、テレコミュニケーションの分野がきわめて多くの学生を集めている。その理由は、この周辺には多数のコンピューター関係の産業があり、その労働市場性がきわめて大きい為である。Job Market をリサーチする専門の人がいて、学科コースの転換等に役立てている。電子・コンピューター関係はその結果として、出来たコースといえる。教授陣を集めるのに苦労した。幸い、州立大学の大学院で、教授陣の再教育が出来たことと、政府機関の退職者をむかえ入れることに成功した。第一線の人々は皆企業へ行ってしまうという悩みは日本と同様らしい。

他に、ここではラーニング・センターという学習の遅れている学生に自習を補助する視聴覚の秀れた教室を見ることが出来た。ビデオやラボはめずらしくはないが、チューターとよばれる教官が、学習の手助けをしている場所である。質問を受けて教えている姿は、落ちこぼれた学生をすくい上げるにはこのシステムは有効なのだろう。一単元が終ると、自分でテストを受ける。80点に達しない学生は又、再学習するという方式である。

チェンバレイン・ジュニア・カレッジ 7月31日(火)

この学校はボストン市のバック・ベイ地区に位置している私立短大である。きわめてめぐまれた位置にあって、東京の表参道、原宿のような場所であり、南にはシェラトンホテル、ヒルトンホテル、ボストンシンホニーホール、北にはチャールズ川をはさんで、M. I. T. があり、チャールズ川畔の散歩道、チャールズ川にはヨットやボートとめぐまれた環境にある。広報担当のジェームズ・モルガン氏と京都の同志社大に留学したアメリカ女性が、日本語の通訳として待っていて

下さった。最初から私立の学校だと感じさせる応接態度である。

(歴史)

私立チェンバレン短期大学は伝統的教育をめざす女子学生のために1892年に設立された。1920年代まで、女子学生のアカデミック教育を第一の目標としてきましたが、1920年代から、職業のための技術教育コースが、加わってきました。1950年に、男女共学の学校になり、同時に本格的に就職の為の職業教育コースが新しいプログラムとして導入されました。このような学校の歴史を通して、チェンバレン・ジュニア・カレッジは職業教育と伝統的アカデミック教育の両方を学生に提供する短期大学となったのである。(パンフレットから抜粋)

この学校は一言で表わせば、専門学校型の私立短大と云える。きわめて歴史が古いにもかかわらず小規模校で、アメリカの私立短大の歴史を一身に表現しているような学校に見える。校舎はイギリス人達が建てたヨーロッパの伝統的なマンションを改造したものである。キャンパスは、街をそのまま借りているという風である。学生数は850人、授業料は寮費を含めて、7000ドル～8000ドルと高い。一般教育以外は文化系の職業コースとインテリアデザイン等、あまり資金のかからない技術系コースを持っている。広報官の説明では、学生募集に知恵をめぐらしている。キャンパスはボストンという環境に在ることが第一であるから、校舎もすべてこの街中の建物を買得ること。寮を確保すること。学校の名を知らしめる広報に最大の工夫をすること。高額の授業料を払える外国人、日本、アラブ等の外国人学生の募集(日本語のパンフレットもある。)アメリカでは私立短大に直接公費援助はないから、学生集めをしなければ成り立っていかない。都会型の職業教育に徹底している感じを与えるものであった。



チェンバレン短大の玄関前



チェンバレン短大の学寮

4) インタビューを終えて

アメリカ大陸の西から東へ、18日間、3大学4公立短大1私立短大の見学とインタビューの旅を終えて、主要なインタビューの録音テープは8時間を越えてしまった。

アメリカの高等教育の中でも、私達は主として、短期大学の実態を知ることに関心をもち、専念をしたつもりである。そのことによって、中日本自動車短期大学の将来を問うという大きな目標を持ち続けた。私個人としても、以前から研究会等で、日本の私立短大の勉強をしてきたつもりであった。が具体的に、私立短大の将来像とは何かについて、結論めいたものを持ってたわけではなかった。だからこの研修旅行には、期待をもって出かけたつもりである。最大の研究目標であった公立短期大学——主としてコミュニティ・カレッジ——の実際の姿が、少し理解出来た。①4年制大学の前期教育 ②2年完結教育としての専修学校・職業教育 ③地域社会の成人教育・マイノリティ教育の総体であった。きわめて多数の学生を集めている。1980年で約450万人、30年間で20倍以上の高成長の学生増。インタビューの中でコミュニティ・カレッジの特色として出て来たものを列記すると、①平均年齢がかなり高い。学生が非伝統的の学生である。②昼・夜両部門をもっている。③地域学生——通学生を主対象としている。④カリキュラム・教育プログラムが多様で、転換性が高い。労働市場のニーズに適合する職業教育コースの設立。⑤授業料がきわめて安い。州立大に比較しても低い価格である。

私立短期大学は、ボストンのチェンバレイン・ジュニア・カレッジのみの訪問であったが、この学校の歴史的变化を見れば、私立短大がアメリカでたどってきた典型的なスタイルと考えられる。私立短大は中西部、東海岸に存在する公的短大の爆発的發展、授業料の安さによって、1980年には95%が公立、たった5%が私立短大生という数になっている。進学教育から職業教育。女子教育から男女共学。私立短大の学生平均数は約500人と小規模である。授業料は7000ドル強。私立短大の苦境の最大の原因は財政問題。コミュニティ・カレッジの最大の強みは、授業料が無料ないしは年間650ドル程度ときわめて安いことの表裏一体の理由である。

5) 結びにかえて

最後に、アメリカの短期大学（公立、私立）を研修、見学した結果、中日本自動車短期大学が学ぶべき問題点をいくつか記して、結びにかえたいと思う。

その前に、再度確認しておくべきことは、アメリカに於ける短期大学（公立・私立共に）と日本のそれとは、ずい分異っている。(1)アメリカの場合、短大の主要な役割は、4年制大学の前期教育の性格がきわめて強い。全ての短期大学の5割ほどは、大学への進学コースの学生である。日本では、4年制大学へ編入する学生は例外的である。(2)アメリカの短大の職業コースは、きわめてJob Marketのニーズに合わせて、プログラムが、すばやく変化していつている。日本は、就職に合わせて学科編成する財政的にも制度的にもまだ充分とはいえない。その為、各種学校二年課程が、その穴埋めをしている。(3)成人教育の役割についても、日本の場合、きわめて遅れている。

制度的にも教育理念からも結局日本の場合は短大は4年制大学に次ぐ2番手になる。女子教育という美名のもとに、それがカムフラージュされているようである。

中日本が、アメリカの短大から学ぶとすれば、それは制度的には、職業コースに徹することも一つの方法である。その場合、公的資金をいかにとり入れるかによって、近代的付加価値の高い職業コースや、資金の余り必要でない文科系の職業コースをうまく組み合わせることを留意する必要がある。職業教育を高度化し、外部からの研修を引き受けること。東南アジアを中心に留学生や特別研修生の受け入れをすること。多様化と国際化は重要な充実策であり、拡大策である。

最後に教育機関として、最も大切なことは、受け入れた学生を徹底的に教育すること。学力差があるからといって見放さずに、貴重な人材として育て上げるための方策をこうじること。——きびしく教育することが求められる。